

おじさんのさえずり講座

野山や高原での野鳥のコーラスはすばらしいものです。その中に身を浸す幸福感は何とも言えないものがあります。その中で個々の野鳥の声が聞き分けられればいいと誰もが思うでしょう。野鳥のさえずりはよく分からない、難しい、といって敬遠されがちですが、さえずりが聞き分けられるようになりますと、また別の世界が広がります。私なりの野鳥のさえずり聞き分け方講座の始まりです。

さえずりを覚えるというとても大変そうですが、日本で見られる全部の野鳥というわけではありません。水鳥は、はずしてもよさそうですし、ほとんどさえずりを聞く機会のない冬鳥もはずれます。さらに、島の鳥や北海道、九州などに固有の鳥もとりあえずは関係なさそうです。すると、後は身近な留鳥と夏鳥だけになります。何となく、たいしたことはなさそうな気がしませんか。

Step 1

カセット、CDなどでも結構ですから、まず覚えやすい野鳥から覚えてゆきましょう。

カッコウ、ツツドリなどのホトトギス科の鳥やムシクイ類は、特徴があって聞き分けやすいもののひとつです。カッコウとホトトギスは、すぐに分かると思います。ホトトギス科の中で最も早く渡ってくるツツドリも竹筒をたたくような声で、一度聞いたら忘れられない鳥です。ジュウイチは「ジュウイチー、ジュウイチー」と鳴くとありますが、初めて実際に聞いた時は分からないかもしれません。かえって、かつて「慈悲心鳥」といわれたというように「ジヒシン、ジヒシン」と聞いたほうが、合っているか

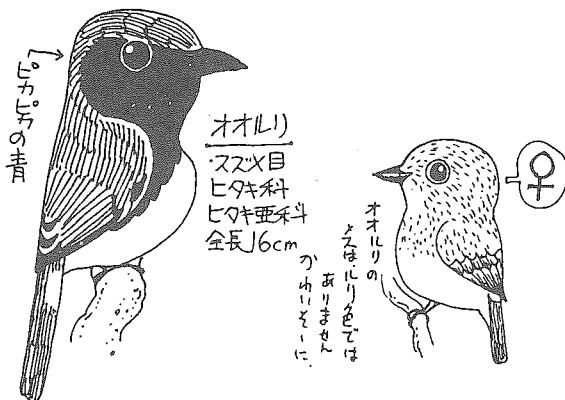
もしれません。ホトトギス科の鳥は、種類によって托卵する相手が決まっていますので、そこにどんな野鳥が住んでいるかも想像がつくようになります。たとえば、ツツドリは、センダイムシクイなどに托卵しますし、ジュウイチは、オオルリやコルリにという具合です。

また、ムシクイ類の代表といえば、どなたも御存じのウグイスですが、ムシクイの仲間は姿はそっくりですけど、さえずりは全然違います。「チオチオビー」のセンダイムシクイ。「ゼントリ、ゼントリ」のメボソムシクイ。「ヒツキー、ヒツキー」と鳥とは思えない声で鳴くエゾムシクイ。初めて聞いた時は分からないかもしれませんが、何回か聞いている内に見当がつくようになると思います。彼らは、標高によって住んでいる種類が違います。その鳥の住んでいる環境やどのくらいの標高のところにいるかなどが分かれば、どんな野鳥が鳴いているのか見当がつけやすくなります。

そしてやはり、野外に出て実際に耳を傾けてみましょう。レコードと違い、空気のうまい、すがすがしい緑の中での野鳥のさえずりは、気分をリフレッシュさせてくれます。でも、覚えただけなのに、全然聞き取れないかもしれません。大丈夫です。耳が慣れてくると、特徴のある声だんだん聞き取れるようになるはずですよ。覚えつつもりにのにすぐに忘れてしまう。そんなことは、気にしなくて大丈夫です。忘れては覚え、忘れては覚えして行くうちにだんだん頭の中に定着していきますから、一度に覚えようと思わずに、少しずつ確実に行きましょう。

Step 2

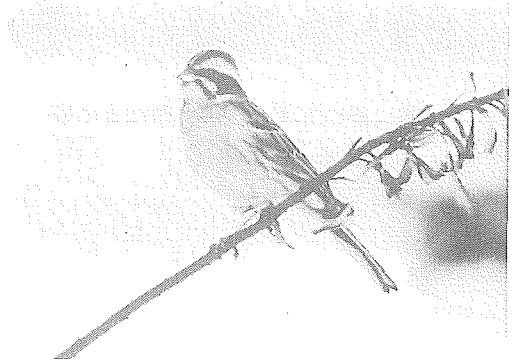
ホオジロ、シジュウカラ、コゲラ、イカルなど身近な所において、山の高い所まで分布してい



る野鳥のさえずりを覚えましょう。肝心なのはいかにベースになる(確実に分かる)野鳥の数を増やすかです。言い換えれば、自分なりのフィルターをいかに多く持つかということになります。

ホオジロやシジュウカラのさえずりは早春の野原では、どこでも聞かれるおなじみのものですが、節回しや声の質等をよく聞いておきます。特にホオジロの仲間はよく似ています。とりあえずは、さえずりの主がホオジロの仲間だというのが分かればいいのではないかと思います。またシジュウカラの仲間もよく似ていて難しいものですが、彼らは、冬に混群を作るので、その時に地鳴きをよく聞いておきます。さえずりとは違いますが、覚えておくと大いに役に立ちます。「チー」とメジロのような声で鳴くのはヒガラです。「ニーニー」もしくは、鼻声で「ピー」と鳴くのはヤマガラです。「ツッ」もしくは、ヤマガラとよく似た「ジャー、ジャー」はコガラです。また「ジュリー」もしくは「ブリリッ」と鳴くのはエナガです。ただカラ類はいろいろな声で鳴きますし、どれもよく似ているのでなかなか分かりにくいと思いますが忘れながら覚えていって下さい。

初夏の山を歩いていて、一番多く聞かれるのは、カラ類のさえずりです。「チチピン、チチピン」と軽快に鳴くのは、ヒガラです。たぶん最も聞く機会の多いさえずりだと思います。ヒガラとよく似ているのがシジュウカラです。「ツピーツピー」とヒガラよりもゆっくりと鳴きます。ただ、中には、変わり者もいて、ヒガラそっくりに鳴くシジュウカラもいますし、逆にシジュウカラかと思っていたらヒガラだったということもあります。細かいことは、気にしないほうがいいと思います。こういうのもいるんだなと思うくらいでいいでしょう。「ツンツンピー」もしくは「ピーツツツ、ピーツツツ」と鼻にかけて鳴くのはヤマガラです。コガラは、地鳴きの時はしわがれ声なのに、さえずりは、澄んだ柔らかい声で「ホヒー、ホヒー」と鳴きます。まるで森進一がさだまさしで歌っているようなものです。とにかく、カラ類をある程度聞き取れるようになりますと、どんな所に行っても大丈夫です。さて、これでもう、フィールドでさえずっている野鳥の半分以上はわかるようになったはずです。



ホオジロ (登坂久雄・八王子市)

Step 3

オオルリ、キビタキ、クロツグミという歌い手は姿もきれいですし、さえずりもすばらしいものです。

最初から、さえずりそのものを覚えようといっても無理があると思いますので、声の質や節回しを覚えたほうがいいでしょう。慣れてきますと、それぞれに特徴があって、チョット聞けばすぐに分かるようになります。でも彼らは、いろいろなさえずりをしますので、最初は、こういうふうには鳴いたらこの鳥だということを1フレーズでもいいですから覚えておくのがいいと思います。すると分からないさえずりでも、じっと聞いていると自分の知っているフレーズがチョロッと出たります。その時は思わずニヤリとしてしまいます。そして姿を見せた時、想像していたとおりの野鳥だと最高の気分です。

キビタキは「ピッコロロ、ピッコロロ」と軽快に鳴きますが、初めに「フィーチャー」という鋭い口笛のような声で鳴くことが多いようです。オオルリは、ゆったりとした大きな歌を歌います。最後に「ジジ」と鳴くのが特徴です。クロツグミは、声量のある声で、いろいろな鳥のさえずりを混ぜて歌います。ずいぶん変わったウグイスだと言った友人がおりました。歌いだしに「キョッ、キョッ、キョッ」と入るのが特徴といえば特徴です。

いろいろと述べてきましたが、さえずりは、同じ種類でも個体によってずいぶん違うことがありますし、地方によって方言もあります。レコードは標準語だと思って、忘れることを恐れずに、少しずつ覚えていって下さい。

(藤原寛治)